

書評

〔評者〕
須崎紳一郎
武蔵野赤十字病院救命救急
センター長



急性中毒ハンドファイル

森 博美, 山口 均 編

A5判 頁320 2011年
定価 3,990 円(本体 3,800 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-01426-7] 医学書院刊

ベテラン救急医ならいざ知らず、「中毒」と聞くと身構えてしまうだろう。何と言っても原因物質は無数にある。日常頻度の高いマイナートランキライザーの過量服用なら、まだ診療勘もあるが、中毒には耳慣れない薬も農薬も脱法ドラッグもある。最近では「得体の知れない外国薬？」も稀ではない。原因物質の情報検索には、まず医薬品なら添付文書ファイルか、それらをまとめた『日本医薬品集』が探される。医薬品以外でも WEB 検索は強力で、瞬間に(しばしば膨大な)情報が PC から打ち出される。でも、それらを見ても「中毒の病態」も「毒性」もはっきりせず、何より肝心の患者の「治療・対処」にはほとんど無益な記事の羅列だと気付く。もともと中毒のための資料でないのだから。結局、中毒を熟知し、「診療を読める」者が厳選した情報でなければ、量が多くても実診療の役には立たない。

本書では例えば医薬品では収録は 33 種に絞られ、その一方で外用消毒薬の「マキロン®」が載せられているなど、ややもすれば偏った選択に見えるかもしれない。しかし、これまで 30 年間、救急に専従し急性

中毒に接してきた立場で眺めれば、本書の記載対象 100 種の選び方は実に渋い。農薬、家庭用品、工業用薬品、自然毒と合わせて、日常の救急臨床で接する中毒物質はまず本書で網羅されていると言ってよい。この点、本書には同じ著者らによるロングセラー『急性中毒情報ファイル』とその改訂が生かされていることは間違いない。

本書は比較的小コンパクトである。「ハンドファイル」との名称は携帯性を重視したものだろうが、得てして小判の冊子は、いざ開いても必要な内容が不十分で、実用性に欠けることが少なくない。不用品記載を削り必要な項目・記載に絞り込んで書き込むには、著者の経験と思い入れがなければなし得ない。総論の「中毒症候」一つをとっても他書にはない明快な解説であり、一読、腑に落ちよう。

本書を評せば、大垣市民病院薬剤部に勤務しつつ長年急性中毒を追ひ、第 33 回日本中毒学会総会を主催された森博美先生の、中毒への情熱と執念がギュッと詰まった本である。